

意見

堀江 聡

今回の大会では特別講演のバーネット教授を小林氏、水田氏に加えて、西洋中世哲学研究の開拓すべき領野——これを「アラビア哲学」（バーネット教授の講演名）と呼ぶか、「イスラーム哲学」（小林氏の提題名）と呼ぶかで、聴衆は未決の状態に投げ込まれたままであるが——の展望を与えてくれたこと自体は歓迎すべきことであった。小林氏が前半で対機説法宜しく我々素人に、イスラーム哲学史の概略と研究史の問題点を過不足なく提示され、後半では従来論議のトポスであったし、今後もそうあり続けるであろうイブン・シーナーの空中浮遊人間をテキストに添って分析して下さったのは有難かった。一方、水田氏はトマスの通称『対異教徒大全』を基にして、能動知性の個別化・内在化ゆえに生ずる人間知性の多様性から、逆に異なる知性・文化を許容する道を探ろうとする。その意味では、両提題は知性論を共通なものとして巡っていたと言えるかもしれない。しかし、これは接点と呼ぶには広すぎはしないか。空中人間との理論的対決を意図するならば、小林氏も註で引いた松本正夫の第二志向を第一志向に優先させる転倒を指摘する古典的議論を足場に、松本以後の研究の進展を加えて批判を増築する道もあったであろう。

或いは哲学史的観点からであれば、アヴィセンナのラテン語訳者でもあるグンディッサリーヌス自身の著とも言われる『魂について』で引用された空中人間の思想が、ラテン・アヴィセンナ主義を経てスコラ哲学でいかに批判・継承されるのかを追跡する作業が必要であろう。その際、この比喻そのものは登場せずとも、アリストテレス『魂について』III, 2の自己感覚のアポリア、共通感覚（共通能力?）による統覚論の布置とは異なる、自覚の先験性から我の非質料性・離存性・不死性を導出する箇所を押さえるべきであろう。12世紀から下って、アヴィセンナに擬ディオニュシオス、アスグスティヌス、エリウゲナを折衷したという1508年出版の『第一、第二の諸実体と存在者の流出についてのアヴィセンナの書』に至るまでは少なくとも辿ることになるのであろうか。

小林氏はイブン・シーナーを展開したものとしてスフラワルディーの我性の概念の解説を予告しつつも実現しなかったが、図らずもバーネット教授が紹介したグータス

の仮説が私の関心と共鳴した。それは、スフラワルディー哲学の淵源の一つとして、『アリストテレスの神学』を考えるべきであるというものである。スフラワルディーの名著『照明哲学』でもプラトンの言葉として好んで引用される『アリストテレスの神学』の一節は、『エンネアデス』IV, 8の翻案であり、「しばしば私は私の魂とだけになり、私の肉体を傍らに脱ぎ捨てて肉体なしの裸の実体のようになった。自己自身の内に入り自己自身に還帰し、一切のものから外に出た。そうして、同時に知・知るもの・知られるものとなった」(バグウィー版22頁)とある。「肉体を脱ぎ捨てる」という比喻と「知の主体が知の客体として現勢状態の実体になる」という記述は、プロティノスの該当箇所には見られない注目すべき附加である。『治癒の書・魂について』V, 7の空中人間の現れる箇所でも肉体は脱ぎ捨てるべき衣服に譬えられており、イブン・シーナーが『アリストテレスの神学』の部分的註釈を遺していることに鑑みれば、哲学史のミッシングリンクを埋めて一本の線を引きそうな予感を禁じえない。

時間が許せば、おそらく展開されたであろう空中人間のさらなる分析は、マルムラの解釈の検討かもしれない。それによれば、元来空中人間は先験的自己の証明としてではなく、その体験知グノーシスへの喚起として企図されたものだというのである。さすれば空中人間とは、離脱した覚者と「杖を叩いて正道に戻してやらねばならない盲人」(I, 1)との狭間であって比喻の謎解きをして覚醒しうる者に向けられたエイコーンなのかもしれない。

意見

松本 耿郎

イブン・シーナーの哲学はイスラーム世界においてアリストテレス哲学を継承したものとされる。しかし、その世界観には新プラトン思想やその他オリエント地域の諸要素が大幅に取り込まれている。イブン・シーナーの哲学の系譜に属する思想家たちをイスラーム世界では「逍遥学派」と呼ぶが、イスラーム世界の「逍遥学派」はアリストテレス哲学そのものを継承するのではなく、ギリシャ・ヘレニズム思想の融合哲学と呼ぶべきものである。ただし、哲学者としてのイブン・シーナーはその旺盛な知識欲と鋭敏な直観に基づく広範な学的活動という点において、アリストテレス